

日本人大学生における食品添加物への意識・行動に関する研究

服部 実穂

自身の体を構成しているものは、自身が摂取した食べ物である。健康的に生きるためには、食品に含まれている食品添加物といった内容物を確認するとともに、それらについて理解をした上で食品を選択することが重要である。本論文では、どのような介入によって日本人大学生の食品添加物に対する関心が高まり、自主的に食品添加物に関する情報を集める(以下、自主的な探索行動)かを検討することを目的とした。介入方法を検討するにあたり、本論文では研究Ⅰでweb調査を、研究Ⅱで実験を行った。

研究Ⅰでは、①日本人大学生が外国人に比べて食品添加物への関心が低いことを確認するとともに、②人々が自主的な探索行動を行うきっかけを探った。そのために、①日本人大学生と外国人の健康意識・食品添加物への関心・食品添加物への危険な印象・自主的な探索行動の程度を測定し、②自主的な探索行動をとった契機を自由記述で探った。その結果、日本人大学生は外国人に比べ、健康意識・食品添加物への関心が低く、自主的な探索行動をしていなかった。また、自主的な探索行動を行うきっかけとしては「メディアや授業からの情報」と「周囲の人の行動やアドバイス」が多く報告されたことがわかった。

研究Ⅰの結果を踏まえ、食品添加物の危険性を訴えても食品添加物への自主的な探索行動は促進されないと考えた。なぜなら、日本人大学生と外国人の危険な印象は同程度であったにも関わらず、外国人のほうが自主的な探索行動をとる傾向にあったからである。この点は、身体的活動を行う動機づけとして、健康に対する危機感は抽出されなかった(Keegan et al., 2016)ことから窺える。

以上より、研究Ⅱでは、食品添加物に関するきっかけを実験的に操作することで、その前後での食品添加物への関心や態度、自主的な探索行動を変化させることが可能かどうかを検討した。実験では、参加者群によって異なる教示を行ってから食品に関する動画を視聴し、その後設けられた休憩時間内に食品添加物に関する情報収集(研究Ⅱでは関連図書を読むかどうか)を行うかを観察した。きっかけとして操作した事前教示は、「動画の食品添加物の解説者が有名大学の教授であること」(権威強調群)、「食品添加物が危険であることを訴える内容の動画であること」(危険強調群)、「人気の動画であること」(周囲支持群)の3種類であった。権威強調群は、研究Ⅰで得られた「メディアや授業からの情報」を、周囲支持群は「周囲の人の行動やアドバイス」を反映した群であった。よって、権威強調群と周囲支持群では食品添加物への自主的な探索行動が他の群より多くなるが、危険強調群は変わらないという仮説をたてた。事前教示の無い統制群を加えて実験を行った結果、休憩時間内で食品添加物に関する書籍を読むという本実験での自主的な探索行動は、どの教示の群間でも変わらなかった。一方、食品添加物に対する今後の行動意図は、権威強調群と危険強調群で統制群より有意に高くなった。意図には変化があったものの、実際の探索行動がどの群でも見られなかったのは、Ajzen(1991)の計画的行動理論における「行動への態度」は高まったが、「行動統制感」が高まらなかったためだと考えられた。

以上の2つの研究の結果から、自主的な探索行動を高めるためには、権威強調群・危険強調群に計画的行動理論の行動統制感を高めるための方略を追加することが有効であると思われる。例えば、実際に自主的な探索行動を日常的に行っている人の様子を観察することで、食品添加物に対する具体的な探索行動を学習することなどが挙げられる。また、短期的な行動の変化ではなく、継続的に見られることが本来は望ましい。よって、今後は行動変容ステージモデル(Prochaska & Velicer, 1997)を用いて食品添加物に対する継続的な行動が見られるための方法などを検討していく必要がある。(安全行動学)